

志賀直哉「和解」論

— 劇的な「和解」を生成するもの —

下岡友加

近年、志賀直哉の「和解」(大6・10『黒潮』)に関する論考において、必ずと言ってよい程に取り上げられる問題が二つある。一つは「特異な時間構成」(亀井雅司氏¹⁾)であり、今一つは主人公順吉が書きあぐねる小説、「夢想家」に関する記述の問題である。特に、前者の「和解」の時間については、「時間的關係の処理が簡単ではなく、それがすらすらと理解されにくい」(須藤松雄氏²⁾)との批判がある一方で、「読み取るのに『難解な点』などどこにも生じてはいない」(山田有策氏³⁾)との反論もなされている。また、「作品内部の時間が錯雑し、一読明瞭というわけには行かない」が「挿入部を抜き取って読めば少しも難解ではない」(本多秋五氏⁴⁾)といった見解も存する。しかしながら、最終的に検討されるべきは、そうした読みの難易の程度ではなく、「和解」の「一見「難解」に感じられる時間の構成、それに伴う出来事の配列(物語言説)が、果たして如何なる作の具現化を讀者に可能たらしめているかという事ではないだろうか。

本稿は、「和解」の時間構成と共に、その挿入された時間の前後の記述の在り方を中心に見ていく事で、この作品(の物語言説)が、いわば劇的な「和解」の成就を伴って顕現させている事を明らかにするものである。そして、作者自身の父との和解を描くこの作品にとって、

いささか無関係にも思われるような「夢想家」に纏わる記述が、その「和解」の提示に大きく関与している点についても言及する。また、それは作者自身が当作品について述べる、「何の作為もせず、事実を只その儘に書いて行つた」という方法の内実の一端を説明する試みでもある。

一

既に諸氏によって明らかにされてきたことであるが、今後の説明の便宜のためにも、「和解」の時間構成についてまとめた、次の資料1を参照して頂きたい。

資料1 「和解」の時間構成

一章	7・31	慧子の一周忌。上京。墓参り。祖母訪問。
二章	8・13	「夢想家」から、空想の利く材料にかえて執筆。

十一章	8・23	上京。衰弱した祖母の様子から、取りかかって
十章	7・23 25 or 26	女児（留女子）誕生。 上京。祖母に赤児の命名をしてもらう。
九章	今年2月 11月	創作活動が徐々に盛んになる。 妻懐妊。 妹出産。妻と鎌倉へ。
八章	8・20	妻と旅に出る。
七章	8・1	慧子の葬儀。
六章	7・31	慧子死亡。
五章	7・30	慧子発病。 我孫子に帰る。
四章	7月上旬 昨年6月	妻と慧子、我孫子へ移る。 妻と慧子、我孫子へ移る。
	秋	上京。父と衝突。
	10月	我孫子に住む。
	6月	赤城山に滞在。
	一昨年の春	京都で父に会うのを拒否。
三章	8・15 8・16 8・19以降	執筆完了。 上京。祖母訪問。父と二年振りに対面。 十月の雑誌に出すため「夢想家」を書き直す ことにする。

起こつた出来事の間、つまり物語内容の時間に忠実に「和解」の記述を追うとすれば、三章の途中から十章、一章から二章、そして十一章から十六章という流れになる。二章と十一章の物語内容は約一週間の間隔しかあいていない。しかし、三章（の途中）から十章とかなり長い挿入部分が存するために、それ以上の時間が経つたように、読む側には感じられる構成になつてゐるのである。この事を関谷一郎氏は「順吉の変貌が説得的たり得る時間の内実が創り上げられ」てゐると、積極的に評価してゐる。しかし、ここで確認しておきたいのは「順吉の変貌」を「説得的」にしているのは、果たして入れ替えられた時間のみであろうか、という事である。実は、このいわば入れ子式の時間構成と平行して、挿入された時間を挟んだ前後の順吉像に、より差異が生じるように記述（の操作）が行われているのではないかと考えられるのである。

いる「夢想家」の調子まで狂わしかねないと思ふ。

父への手紙断念。「夢想家」に再び取りかかる。
実母の祥月命日。上京。父と和解。
墓参り。我孫子へ帰る。
父ら、我孫子訪問。
父ら、我孫子訪問。
「夢想家」をそのまま書き続ける気がなくなる。
上京。一族で会食。
父との和解を書くことにする。
叔父の手紙届く。

順吉の心境の変化が「調和」という言葉を多用することによって、あからさまに語られはじめるのは、九章である。そこでは順吉の「調和的な気分」が「父との関係にも少しづつ働きかけて行つた」と、その気持ちの変化が彼自身によって認められている。ところが、実際九章よりも時間的には後の事である一、二章において、順吉が既に「調和的な気分」を獲得しはじめている状態にあるという事が、果たして読者に認識され得る（認識し得るような記述がなされている）であろうか。一章でまず描かれているのは、公然と祖母に会えない事で「不愉快」になり、「腹立たしい気分」におおわれる次のような順吉である。

母は云ひにくさうに少し小声になつて、

「今日はお父さんお在宅なの……」と云つた。

「さうですか。又其内に出て来ませう」

自分は出来るだけそれを無心らしくいつたが、屈辱から来る不愉快な表情は電話口だけに露骨に自分の顔に現れるのを感じた。

(中略)

自分は未だ少し早いとは思つたが、其店の電話を借りて又母へ掛けて見ると、父は未だ自家にゐると云ふ事だつた。茲でも自分は不愉快な、そして腹立たしい気分には被はれた。(一)

右では、「調和的」というよりもむしろ、順吉の不調和、不快な状況が前面に押し出されている。続く二章でも順吉は体の不調から、何の罪もない妻に苛立ち、「かう云ふ時お前のやうな奴と一緒にゐるのは、独り身の時より余程不愉快だ」と言い放つて、ついには妻を泣かせている。

そうした順吉の不機嫌を主としてとらえる描写の一方で、彼の愛慕を告げる記述も見出だされる。二年振りに父と対面した順吉の様子が次である。

緊張した沈黙が一寸来た。かう云ふ場合自分は毎時人一倍それを強く意識してギューツと堅くなる性質だが、其時は如何したのか穏やかな気持で父の顔を見上げて居られた。かう云ふ場合はこれ迄も度々あつた。その場合父が不愉快な顔をすれば、それだけ自分も不愉快な顔をする方だつた。さうしまゝとしても自分の頑な気持が承知しなかつた。そして其場が過ぎても其不愉快は残つて今度は自身を苦しめるのが例であつた。(二)

自分の留守中に、麻布の家に上がり込んで祖母を見舞つていた順吉の姿に「云いやうのない不愉快な顔をした」父に対し、順吉の方は「其時は如何したのか穏やかな気持で父の顔を見上げ」る事が出来たという。しかし、時間的にはここ以前の事を語る九章で「調和的な気分」が「父との関係」に影響を及ぼしはじめた事は彼自身に自覚されていはずである。その事からすれば、父への「穏やかな気持」は今更「如何したのか」と語られるような偶然ではな(清水康次氏)い事になる。物語内容の時間的先後関係からして、九章よりは後の事であるにも拘らず、二章では「調和的な気分」を獲得しはじめた状態の中に、順吉の気持ちを位置付ける記述がなされていないのである。また同じく二章では、順吉が父に対して「随分不愉快を持つてゐた」事、その父への感情の基調は「尚不和から来る憎しみである」と思つていた事が語られている。それに対して、二章からわずか八日後の事を描く十二章では、「自分は今、父を憎んでは居ない」との明言がある。無論、十

第二章に至っても、父と本当に和解出来るかどうか、「父の方で心からの憎しみを露骨に現はして来た場合」にも「穏かに、今の気持を失はずに父に対する事が出来るだらうか」と順吉は依然危ぶんでもいる。しかし、わずか八日前の第二章に描かれるような彼の様子からすれば、かなりの進展のように見受けられる。以上のように、物語内容の時間の順に沿って、描かれた順吉像を眺めた場合、一、第二章の彼の様子は、九章を経て十一章の約一週間前のものだと、すんなりと首肯し難いのである。一、第二章の順吉の姿は、その時期としては「不調和」の方向に偏った、いわば負の面をあえて照射する形で描かれていると言わざるを得ない。

その事は、物語言説に従って（一章から順に）読む者に、一、二章を含めた作品前半の順吉を、和解前の父との「不愉快」な関係に苛立っている姿としてあくまで印象づけるのであり、それはやがて九章から顕著となる、「調和」へと向かう順吉の様子と対照的であるが故に、結果として彼の変貌は、より鮮明に作に打ち出されていると言えるのではないだろうか。入れ替えられた時間の構成と共に、そこに施された記述（順吉像、彼の気持）の在り方が、「不調和」から「調和」へと移行していく作の展開（＝順吉の変貌）を、効果的に導き出していると考えられるのである。

一一

志賀直哉の自伝的な作品を評価しない立場をとる正宗白鳥は、「和

解」について「根柢の浅い葛藤につまかれて来た揚句の果てに、涙攻めになるので愛想を盡かした」と、辛辣な批判を行ったが、確かにこの作品では結末部分にとどまらず、総じて登場人物達の「泣く」行為が頻繁に見受けられる。それをまとめてあげれば次の資料2のようになる。

資料2 「和解」にあらわれる「泣く」行為

第二章 順吉、妻を泣かせる。

第三章 十一年前、「これからは如何な事があつても決して彼奴（順吉）の為めには涙は溢れない」と父は人に言う。

一昨年（一）の春、妻は一人で父達を迎えなければならず、弱って泣く。

一昨年（二）の秋、夜半に家を出ようとすると順吉を母は涙を流しながらとめる。妻も一緒になつて涙声を出す。

第五章 （赤児が病気のため泣く。）

赤児の頑張りに希望を見いだした順吉は涙ぐむ。

第六章 赤児が死んで、妻ははげしく泣き崩れる。

K子さんの眼からも涙が流れている。順吉は実母に死なれた時のように泣く。

第七章 三年前、コムボジションの中で、父子が争闘の絶頂で抱き合

つて泣き出す場面が浮かび、順吉は涙ぐむ。

第八章 父に赤児の事で叱られたと妻は電車の中で泣く。

順吉の妹が産んだ赤児を見て妻は泣く。

十章

出産の場面に立ちあつた順吉は涙が出そうなきがする。
 安堵の微笑を浮かべる妻に対し、順吉は「涙ぐましい気持」
 で首肯く。

出生によつて起つた「快いそして涙ぐましい亢奮」が順吉の
 胸の中で続いている。

十三章

母は眼に涙をためて、順吉に父との穏やかな話し合いを求め
 る。

順吉は父に話しながら一寸泣きかかったが我慢する。

父は話しながら眼に涙をため、泣き出す。

順吉も泣きだし、叔父も声をあげて泣き出す。

母は泣きながら、順吉に感謝を述べ、涙をふきながら祖母に
 報告しに行く。

十五章

父の顔を見ると、妻の眼からは涙が出かかっている。
 妻は何も言えずに父の言葉に涙をふきながら只うなづく。

順吉は「響め面とも泣き面ともつかぬ妙な表情」をして、父
 の眼を見る。

父の眼に「或る表情」があらわれ、「心と心の触れ合ふ快感
 と亢奮」で、順吉は「益々響め面とも泣き面ともつかぬ顔」
 をする。

十六章

鎌倉の妹が、和解の話を聞くうちに泣き出してしまったと手
 紙に書いてくる。妹の手紙を読んだ順吉は涙ぐむ。

祖母の妹が国に帰つて和解の話をすると、皆は一緒に泣き出
 したという。

作品が基本的に語る時間の起点は、「一昨年の春」(三)であるが、

その時間を逸脱する記述が「泣く」行為に関連して、二箇所この作品
 にあらわれている。一つは三章における、父が「十一年前」人に語つ
 た、「これからは如何な事があつても決して彼奴の爲めには涙は溢れ
 ない」という順吉への冷淡な言葉である。資料2で傍線を引いた、順
 吉の泣く(涙ぐむ)という行為が、肉親の死や誕生、或いは肉親と心
 が通じ合う感動に見舞われた時に生じている事を考え合わせると、こ
 の父の言葉は順吉にとつて「もはや息子ではない」と断じられたにほ
 ぼ等しい意味を持つものと理解される。これに対して、順吉は父の言
 う事は「無理でない」(三)と思つており、父の言葉に相応するだけ
 の行いを自らがなした事を認めている。「十一年前」の事であるが故
 に、作品のどこでとり扱うことも可能であるはずのこの言葉は、三章
 で引き続き、現在の父子不和の原因が具体的に語られ出す前に、二人
 の不和、葛藤がいかに激しいものであつたか、その深刻な対立の歴史
 が十年以上も前に既に始まつているという前提を、まず読者に知らし
 める役割を担っている。

「泣く」行為に関連して、作品時間を逸脱する二つ目の記述は七章
 に存する。それは父子不和に基づくものでありながら、「十一年前」
 の父の言葉とは対照的な「三年前」の内容である。父との不和を材料
 とした長編のコムポジションの上で、突如、順吉に想起されたのが、
 次のようなクライマックスであつた。

どんな防壁もかまはず入つて行く亢奮しきつた其青年と父との
 間に起る争闘、多分腕力沙汰以上の乱暴な争闘、自分はコムポジ
 ションの上で其場を想像しながら、父が其青年を殺すか、其青年

が父を殺すか、何方かを書かうと思つた。所が不意に自分には其争鬪の絶頂へ来て、急に二人が抱き合つて烈しく泣き出す場面が浮んで来た。此不意に飛出して来た場面は自分でも全く想ひがけなかつた。自分は涙ぐんだ。(七)

右に描かれるのはあくまで想像上の父子の姿でありながら、二人の關係が「最も悲惨なものになつた時」、それが「急な引繰り返り方をするだけの何物か」(七)が互いに残つていてのではないかという希望を、過去の構想と共に順吉は明らかにする。父との關係が「最も悲惨なものになつた時」とは、この章に先だつて五、六章で詳しく描かれた慧子の死により、父への悪感情を当作品中、最も募らせている順吉とも半ば呼応している。また、順吉に想起された父子が抱き合つて泣く場面とは、この後十三章において語られることになる、實際の父との和解の様子「先取りされた原情景」(吉田燦生氏⁹⁾)でもある。八章では、依然として父に腹を立てている順吉の姿が描かれると同時に、慧子の死で「祖母に不愉快を感じた自分を恥ぢ」る順吉の様子も書き込まれていき、続く九章で繰り返し語られる事になる「調和的な気分」(九)、果ては最終的な和解への予兆、伏線として、七章のコムポジションは機能している。

そして順吉に限らず、「和解」の登場人物たちは、作品後半、とくに九章以降では、ごく近い人との間に生じた喜びや感動に、また求愛行為に因る涙を見せ始める。一方、それ以前の涙の所以は、殆どが悲しみの感情に求められる。二章には順吉が妻を苛めて泣かせる場面が描かれているが、本来の時間から言えば、それは十章の後に入るべき出来事である。それが作品前半に配置されているがために、作品に

描かれる「泣く」行為の意味は、悲しみから喜びへと転じる形で、一層整理されている。例外としては五章で、順吉が、一時もちなおすかにも思われた慧子の頑張りに対して、心を動かされ涙ぐんでいるが、直後の章で慧子は結局死に至り、順吉は「実母に死なれた時のやうに泣」(六)く。ここに一時的な喜びは決定的に打ち消されてしまつて

いる。言うまでもなく、「和解」という作品は内容を読む以前から「予定調和のプログラム」(山田有策氏¹⁰⁾)を想起させるタイトルを持つており、この作品が、最終的に「和解」という幸せな結末へと至る、その過程を描いてみせる事自体は特に不思議な事ではない。しかし、少なくとも七章のコムポジションが明かされるまで、和解が成り立つであろう希望的な予測を主人公が持っていることは、伏せられたままである。どこに置く事も許されているはずの、「三年前」のコムポジションは七章の最後にとり入れられ、それを「不調和」から「調和」へと移行する、作のいわば契機とする事で、また、本来ならば作品の後半に位置するはずの時間に起こつた、妻を泣かせるといつた負の出来事を作品の前半に配置する事によって、この作品は「暗」から「明」へという作の流れを、一層牢固なものにして提出しているように思われるのである。

三

以上のような事実の再構成によって、より顕著に立ち現れる事とな

った「不調和」から「調和」、「暗」から「明」への流れを、根本的に生み出す要因として、順吉と父との関係の変化とともにあげなければならぬのは、子供の死と誕生という出来事である。この事については、父子不和と慧子の死とともに「家族のなかの大切なものが破壊されてしまうこと」とし、父との和解と留女子の誕生を「破壊されたものの再建」であると関係づけた、大江健三郎氏の指摘が既にある。「和解」では、慧子について少なからぬ言及が見られ（慧子に関する記述の見える章は、一、四、五、六、七、八、十五章）、特に、その死を描くシーンは作品の中で肥大化していると同時に、作中でも最も緊迫した、印象深い場面を形成している。従来高く評価されてきたが、その赤児の死という、とり返しのつかない悲劇が克明に描かれれば描かれるほど、「和解」という作品にあらわれる「不調和」、「暗」の要素はより大きいものとなる。慧子の死は「若し皆に父と自分との関係に赤児を利用する気がなかつたら、赤児は死なずに済んだのだ」（七）という順吉の周囲に対する激しい憤りと、「総ては麻布の家との関係の不徹底から来てる」（七）という苦い自省と悔恨を招くものであった。やがてそこから順吉は、慧子の死に際して抱いた父への「不愉快」を、和解の達成後、「慧子の事でも今は父に不快は感じてゐない事を自ら感じた」（十五）と言うまでに、解消する。このような観点からすれば、「和解」は慧子の死によって負わされた痛手から、主人公（たち）が次第に、恢復していくプロセスを描いた物語としても読める一面を持つのであるが、そこに初出にはなかった、順吉の「心が明かに感謝を捧ぐべき対象を要求」し、「快いそして涙ぐましい亢奮が胸の中で後まで其尾を曳く」（十）ような留女子の誕生の場面が加

筆、挿入される事によって、「調和」へといわば上昇していく作品の流れはより補強されている。

そして、本来の出来事の順序からすれば、慧子の死→妻の懐妊（留女子の誕生）→慧子の一周忌→父との和解の実現となるべきところが、この作品では先から述べるような物語言説によって、慧子の一周忌が作品冒頭に置かれ、引き続いて慧子の死が、その後、妻の懐妊（留女子の誕生）、そして父との和解が語られるという配列になっている。つまり、作品前半で慧子の死と彼女の一周忌という「暗」の要素を、後半で新たな赤児の誕生と父との和解という「明」の要素をまとめて提出するという出来事の整理がここにも見受けられるのである。

さらに今一つ、この作品の、「暗」から「明」への一連の流れを形成する要因として考えておきたいのが、論の冒頭でも触れた、「夢の家」についての記述である。順吉は「六年前、自分が尾の道で独住ひをしてゐた前後の父と自分との事」（二）を題材とする小説「夢の家」を、散々書きあぐねている。その様子は、二章の冒頭から次のように語られている。

自分は八月十九日までに仕上げねばならぬ仕事を持つてゐた。
夜十時頃から書いたが、材料が何だか取扱ひにくかつた。

（中略）

自分の気持は複雑だつた。それを書き出して見て其複雑さが段々に知れた。経験を正確に見て、公平に判断しようとする自分の力はそれに充分でない事が解つた。自分は一度書いて失敗した。又書いたがそれも気に入らなかつた。たうとう約束の期日まで六日程しなくなつて、それで少しも完成の見込みが立たなかつた。

自分は材料を変へるより仕方がなかった。(二)

右のように難渋する「夢想家」は「八月十九日」(二)の締切りに間に合わないとの判断から「十月の雑誌」(三)へと持ち越され、十一章の八月二十三日、続く十二章の二十四日においても、相変わらず執筆が試みられている(「夢想家」についての記述の点在については先の時間構成を示した資料1を参照して頂きたい)。この「夢想家」は「父との不和」を題材とした小説だけに、多くの場合、実際の父と順吉との関係についての言及を伴っており、『和解』の間には納まりきらない、不和の歴史の深層部分を示す(山口幸祐氏)す機能を果たしている事は極めて重要と思われる。ただし、その役割と同時に見逃す事が出来ないのは、その父との不和が解消された十三章以降も引き続き「夢想家」の行方が語られている事である。最終章には次のようにある。

自分にはもう父との不和を材料とした「夢想家」を其儘に続ける気はなくなつた。自分は何か他の材料を探さねばならなかつた。材料だけなら少しはあつた。然し其材料へ自分の心がシツカリと抱き付くまでには多少の時が要つた。多少の時を経ても心が抱き付いて行かぬ事もある。さういふ時無理に書けばそれは血の氣のない作り物になる。それは失敗である。十五六日までの期日に何か物になる程のものが出来るかしら? (中略)

自分は仕事の日の一日々々少くなる不安を感じた。自分は矢張り今自分の頭を一番占めてゐる父との和解を書く事にした。

半月程経つた。京都から鎌倉へ帰つた叔父からの手紙が来た。

(十六)

「父との不和」を書くようとして、どうしても書けないでいる順吉が、最終的に行き着いた先は、「父との和解を書く事にした」という当初の構想とは全く逆の場所であつた。締切りが「十五六日まで」である事と、その後の「半月程経つた」という記述とを考え合わせれば、「父との和解」を順吉が小説化したであろう事が理解される。書けない「自分」から書ける「自分」へ、しかも書く内容は「父との不和」から「父との和解」へという、創作者順吉の変貌、或いは「夢想家」という小説の転換、この一転する有様にもまた「暗」から「明」への流れを見る事が可能ではないだろうか。当然ながらこのような順吉の創作上の変化は、実生活上の父との和解という出来事に連動している。ただ、その実生活での父との関係を描く段階に終始せず、「夢想家」が「父との和解」を書く事を目的とする小説に転じるまでの経緯が、当作品に書き込まれている事、それが書き込まれてはじめて作品が終りを告げようとする事に着目しておきたい。慧子の死の直後、順吉は次のように考えている。

自分は腹立たしかつた。然しそれ(稿者注…麻布の家との関係の不徹底)を徹底させる為めに祖母との関係をそれに殉死さす事には自分には出来なかつたのである。腹は立つが、不徹底は毎時其所から起つて来た。此事は自分の創作する上にも毎時邪魔をした。

自分は此五六年間父との不和を材料とした長篇を何遍計画したか知れない。然し毎時それは失敗に終つた。自分の根氣の薄い事も一つの原因であつたにしろ、又それで父に私怨をほらすやうな事はしたくないといふ、ごだはる氣も一つだつたにしろ、それよりも其作物の発表が生む実際の悲劇を考へると、自分の気分は必ず薄

暗くなつて行つた。(七)

生活する事と書く事が一体化しているような順吉にとつて、実生活への影響、それへの願慮が絶えず創作を妨げる。その葛藤の最大の場合「父との不和」を材料とする小説だったと言える。しかし、その葛藤、不徹底は実生活上の和解という出来事によつて解消され、逆に「父との和解を書く」事へと転じていく。実生活者としての順吉に和解が訪れた時点のみならず、創作者としての順吉がそれを作品へと結実させる時間までを作中に書き込む事によつて、この作品は不和から和解への軌跡を、実生活と創作という複雑でもつて描いて見せる。それは赤児の死と誕生という、やはり正反対の方向性を内包する出来事とも重なり合つて、作品の「不調和」から「調和」への流れをより重層的に造型する事に寄与しているかと思われるのである。

*

*

*

以上のように、この作品で読者が読まされるものは、作者の体験に基づく材料(事実)が、表現化にあつて見事に関係づけられ、配置される事で顕現した、より劇的で強固な(和解)、不和から「調和」への変遷の物語である。この作品に描かれるのは、極めて個人的な和解に過ぎず、しかも肝心の「不和の原因を明かにしてゐない」との批判も確かに成立し得る。しかし、既に見て来たように、「和解」は「不和の原因」(傍点稿者)と和解という結果を描いた作品ではないようである。(和解)という浄化(カタルシス)をいかにして効果的に生成させるか、そこに多くの注意がはらわれ、そしてそれをこの作品は達成したと言えるのではないだろうか。この「和解」に見出だされる「不調和」から「調和」への流れは、後に書かれる事になる、志賀直哉の唯一の長編、「暗

夜行路」の作の展開を自然、想起させる。「和解」はいわばその雛形でもある。祖父と母の不義の子という運命を担わされた主人公が、結婚後、今度は妻の不義に見舞われるという、設けられた「暗」の要素を持つ「暗夜行路」が、一方では作者自身の経験した事実を利用しつつ、「明」への流れをどのように形成し得ているのか。そこでの構造化のさまについては、「和解」に見られた方法を踏まえつつ、別の機会に検討していきたいと考えている。

注

「和解」本文、及び「唇が寒い―福士幸次郎君に―」(注5)の引用は、岩波書店版『志賀直哉全集 第三卷』(平11・2)及び『同第五卷』(平11・4)に拠つた。但し、ルビは省略した。

(1) 『和解』の構造(『論集日本文学・日本語 第五卷 現代』
昭53・8 角川書店)

(2) 『近代の文学・7 志賀直哉の文学』改訂新版(昭47・3
桜楓社)

(3) 『和解』の構造(『一冊の講座 志賀直哉』昭57・10 有
精堂)

(4) 『志賀直哉(下)』(H2・2 岩波書店(岩波新書))

(5) 「唇が寒い―福士幸次郎君に―」(大11・3 『新潮』)

(6) 『和解』私読(昭62・5 『文学』)

(7) 『和解』の構成(昭63・3 『女子大文学 国文篇』)

- 第39号) 「和解」中の「叙述」の「傾斜」について指摘する、清水氏の論考に小稿は大きな示唆を受けている。しかし、氏が最終的に『「和解」の時間の複雑な構成』の所以を『「和解」のなかに『夢想家』を持ち込んだ結果』と説明する事については疑問が残る。既に山口直孝氏の批判(『「和解」の表現空間』平4・10『日本文藝研究』第44巻第3号)も存するように、六年前、自分が尾の道で独住ひをしてゐた前後の父と自分との事(二)という、「和解」本文中の「夢想家」の内容と、「ノート12」に記された構想全体を「夢想家」と考ふる清水氏の解釈は齟齬をきたすからである。
- (8) 「志賀直哉と葛西善蔵」(昭3・10『中央公論』)
- (9) 『「道草」と『「和解」』(昭57・11『国文学 解釈と鑑賞』)
- (10) 注3に同じ
- (11) 「志賀直哉『和解』―かたまりの読みとり―」(昭55・9 猪野謙二編『小説の読みかた―日本の近代小説から』岩波書店〈岩波ジュニア新書〉)
- (12) 例えば、「和解」を評価しない立場をとる正宗白鳥も、「私の心の中の捉へられたところ」(「志賀直哉と葛西善蔵」注8に同じ)として、この慧子の死の場面を挙げている。
- (13) 「和解」の初出は十五章から成るが、九章と十章の間に留女子の誕生を描いた章が大正七年一月『夜の光』(新潮社)収録の際、新たに挿入され、全十六章の構成となる。
- (14) 「志賀直哉『和解』―(鎮魂)のモチーフによる試論―」(昭62・3『富山大学文学部紀要』第12号)
- (15) このような順吉像を「作品と実生活との表裏一体の在り方」ととらえる、山口直孝氏の指摘(注7に同じ)が既にある。
- (16) A・B・C・D合評「志賀直哉氏の『和解』(黒潮)」(大6・11『文章世界』博文館)
- 〔付記〕本稿は、平成十一年度広島大学国語国文学会春季研究集会(平11・6・20 於広島大学)での口頭発表(「志賀直哉『和解』考―(無作為)という方法をめぐって―)に基づくものである。

(しもおか ゆか)